文化財めぐり

重要文化財聖福寺　修理現場見学会

【講師】
(公財)文化財建造物保存技術協会
古賀　修一　氏、村松　裕　氏
(株)埋蔵文化財サポートシステム
宇土　靖之　氏

大雄宝殿（修理前）

聖福寺の概要

歴史

聖福寺は長崎市街北側の山麓に位置する黄檗宗の寺院です。黄檗宗を伝えた隠元の孫弟子にあたる鉄心道胖（1641～1710）により延宝５年(1677)に開創されました。鉄心は唐商の陳朴純と長崎の西村氏との間に生まれた子で、隠元の弟子木庵に学びました。建物の造営は長崎の奉行所や商人達の協力を得て建立されました。鉄心の後は、唐僧が住職になることはなく、同門の僧侶が住職に任じられました。同寺は、幕末維新以後、広東省の人達が多く帰依したことから、広東寺とも呼ばれました。江戸初期に開創された黄檗宗寺院である興福寺、崇福寺、福済寺の「唐三ヶ寺」に加え、後に聖福寺を含めて「長崎四福寺」と言われています。

境内には大雄宝殿、山門、天王殿、鐘楼、方丈、庫裏、書院、石門、惜字亭、開山堂などがあり、境内地奥の松月院跡地には鉄心禅師の墓所があります。そのほか境内地にはジャガタラお春の碑、供養塔などがありますが、ジャガタラお春の碑は、お春が筑後町に住んでいたことにちなんで建立されたもので、裏には、吉井勇の歌「長崎の鶯はなく今もなおほジヤガラタ文のお春あはれと」が刻まれています。また供養塔は、天保6年(1835)7代目市川団十郎(1791～1859)が先祖供養と子孫繁栄を祈願して建立したものです。

境内で見られる文化財

聖福寺の建物は、大雄宝殿、山門、天王殿、鐘楼の４棟が、平成 26 年（2016）国の重要文化財に指定されています。このほか、鐘楼内に「聖福寺の梵鐘」（市有形、享保２年（1717）長崎の鋳工安山国久が鋳造）、「聖福寺惜字亭」（市有形、経文等寺内の不要文書類を焼却するための炉）、「聖福寺石門」（市有形、金比羅山にあった神宮寺が神仏分離令で破却され、残った石門の要石に唐僧木庵筆の文字が刻まれていたことから明治時代に聖福寺に移築されたもの）などが所在しています。

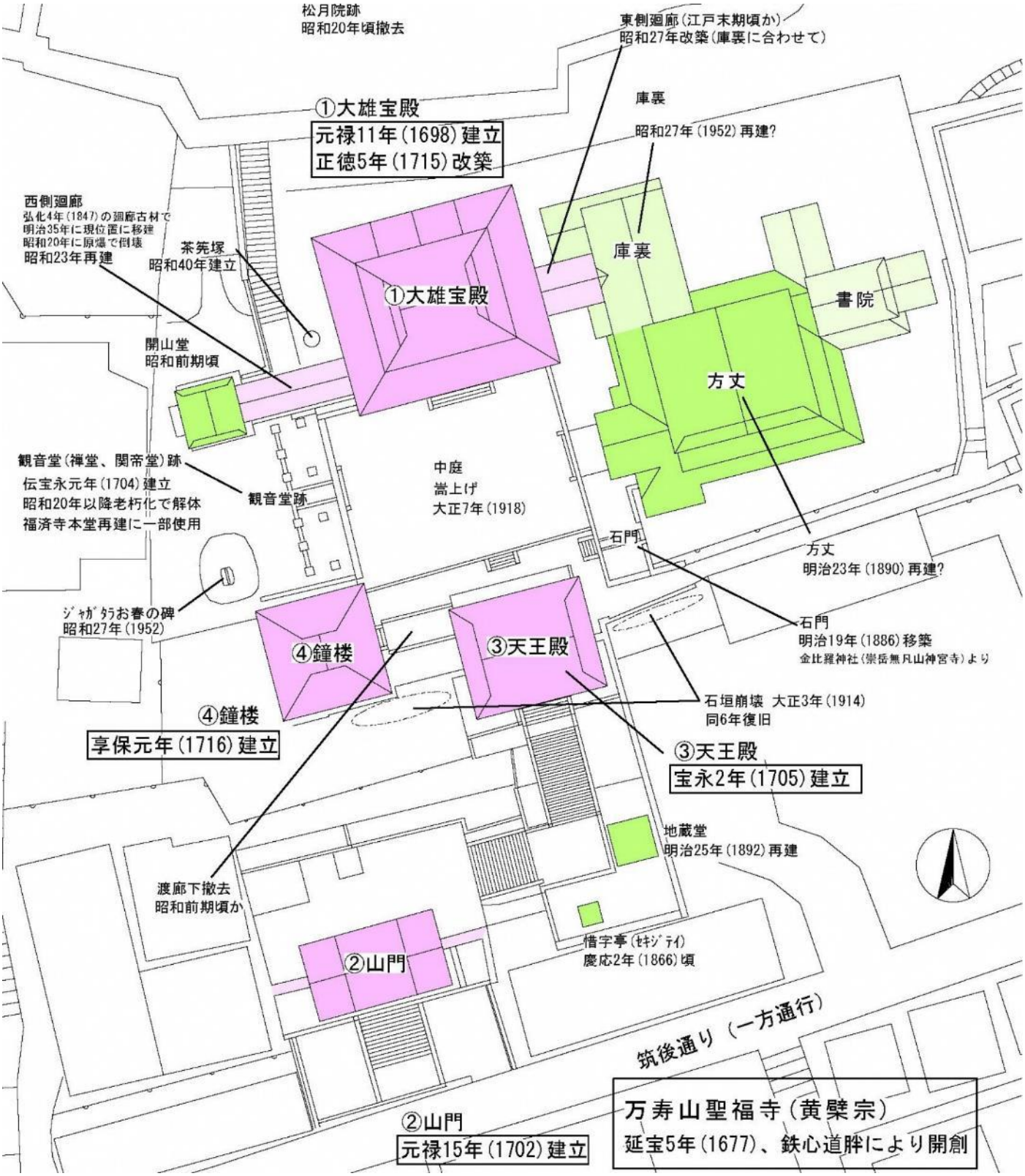
※本資料の無断転載はおやめください。

聖福寺境内地について

聖福寺は「筑後通り」に面しており、入口より石階段を 15 段ほど上った位置に山門と練塀(ねりべい)が南面して建っています。さらに山門をくぐって東に曲がり 17 段程上がると踊場の東面に地蔵堂、南面に惜字亭があります。北に向きを変え 36 段程上がると中庭を囲む境内地の中心となります。

正面手前より天王殿、北側奥に大雄宝殿、西側手前に鐘楼、西側奥に開山堂、東に方丈が配置されています。

【境内配置図】



建物の概要

聖福寺の４棟は建てられた順に、大雄宝殿は元禄11年(1698)建立。桁行三間、梁間四間、二重、入母屋造、本瓦葺。後の正徳５年(1715)に改築されほぼ現在の形式に改修されています。山門は元禄15年(1702)建立。桁行三間、梁間二間、一重、切妻造段違、本瓦葺。大正10年(1921)に屋根瓦を葺き替えており、現在は降棟が省略されています。天王殿は宝永２年(1705)建立。桁行三間、梁間三間、一重、入母屋造、本瓦葺。中門にあたる建物と考えられますが、中央間の正背面を仏間とし両脇が通路となる珍しい形式となっています。鐘楼は享保元年(1716)建立。桁行三間、梁間三間、二重、入母屋造、本瓦葺。他の３棟と比べると禅宗建築に近く中国的な様式が少ないものとなっています。

大雄宝殿　元禄 11 年（1698）建立

山門　元禄 15 年（1702）建立

天王殿　宝永２年（1705）建立

鐘楼　享保元年（1716）建立

建物の破損状況と保存修理工事について

各建物とも経年劣化が著しく、特に蟻害により軸部に支障が目立ち緩んで変形しているもの、空洞化している部材もみられ、きわめて深刻な状態であるため、大雄宝殿を半解体修理、そのほか３棟が解体修理を行っています。令和２年（2020）からの工事で現在は山門の組立中で、令和６年度より鐘楼の解体、令和７年には大雄宝殿、天王殿の工事を順次行う予定です。工事の完了は令和 11 年度（2029）を予定しています。

＜工程表＞　　（工事状況は令和６年６月現在）

建物名称	2020	2021	2022	2023	2024	2025	2026	2027	2028	2029
大雄宝殿		●●●●	●●●●●	●●●		━━━━	━━━━	━━━━	━━━━	━━━
山門	●●●●●●●			━━━━	━━━━				━━━━	━━━
天王殿						●●●●●	━━━━	━━━━	━━━━	━━━━
鐘楼					●●●●	━━━━	━━━━	━━━━		

【凡例】解体…●●●　組立…━━

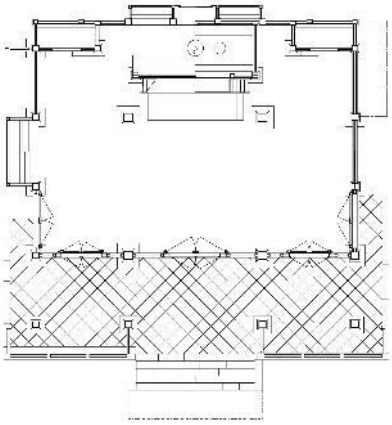
各工事の概要

境内地は傾斜地に面しているため、移動や運搬はすべて階段を伴うため人力で行う作業が多くなります。今回の工事では作業の効率化を図るため駐車場の一部に大型の構台を設置して、仮設資材等の搬入を行っています。

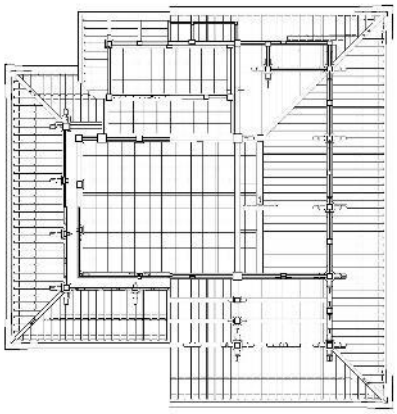
大雄宝殿と山門の工事状況について紹介します。

【大雄宝殿】

大雄宝殿は破損の少ない正面の廊下部分を残して、その他は全て解体を行いました。素屋根内には解体した材料を保管しています。解体後には発掘調査を行い、地面の造成や基礎の工法等の調査を行っています。



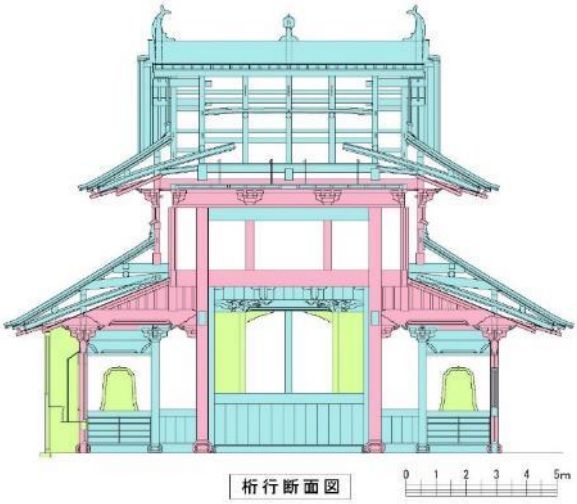
平面図

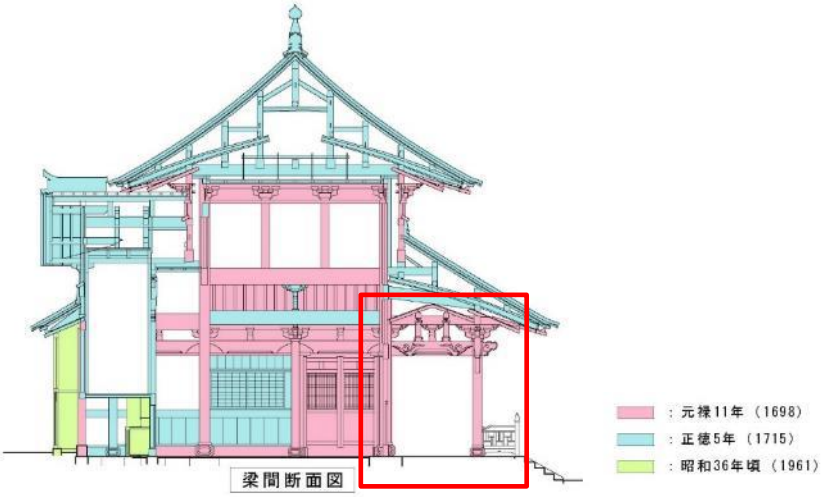


見上図

修理前　外観

修理前　内観





※赤囲みの部分を遺して半解体修理を実施しています。

解体工事の流れ

文化財の建物の修理では、各材に名称と番号をつけて１つ１つ丁寧に解体します。解体作業と並行して、破損している箇所やその原因を綿密に調べて修理範囲を決めていきます。また、過去にどのような改造がされてきたか、部材に残る釘穴や改造の痕跡を調べて記録します。これらの調査の結果を基に、建設当初から現在までの建物の変遷を明らかにして組立方針を定めていきます。

素屋根建設

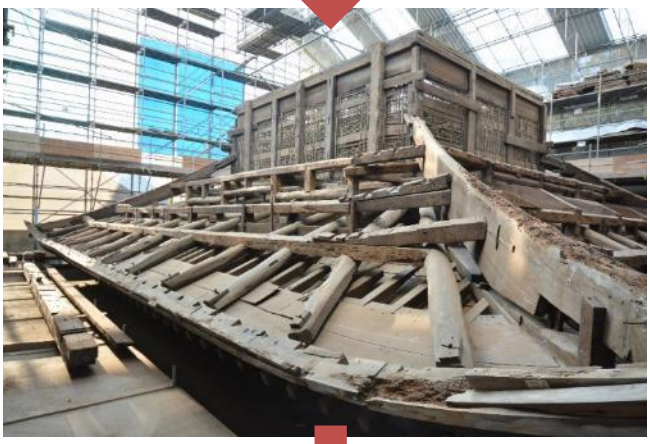
工事中に建物が風雨にさらされないように素屋根でおおいます。

屋根瓦解体

屋根野地板の状況

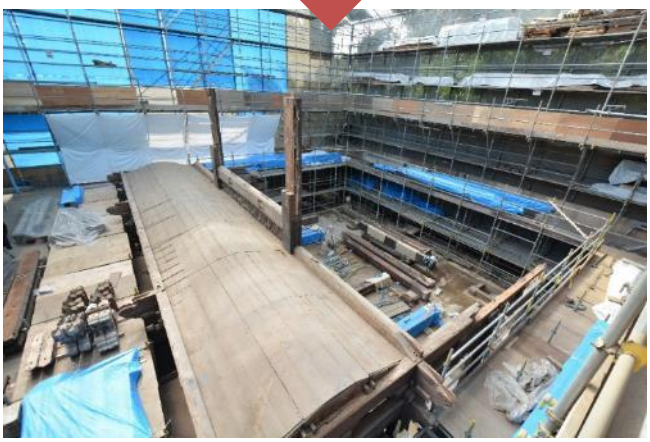
小屋組の状況

梁組の状況



下層部　小屋組解体

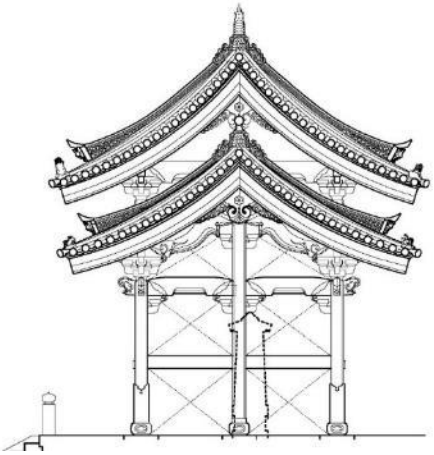
下層部　軒廻り解体



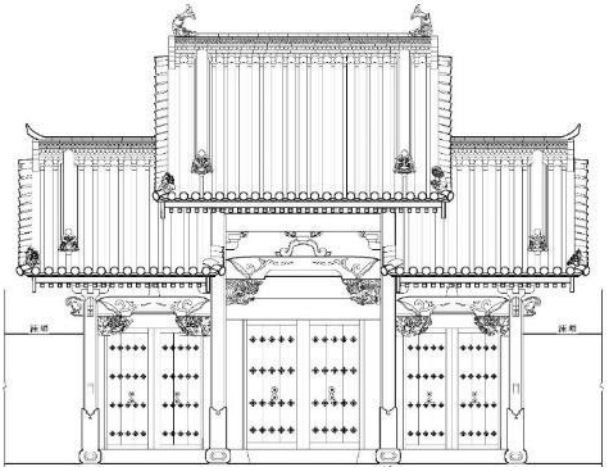
下層部　解体完了

【山門】

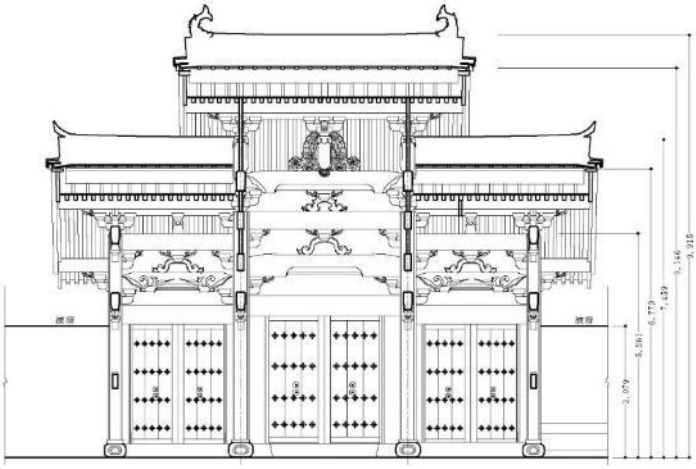
正側面（修理前）



側面図



正面図



桁行断面図

解体工事の流れ

柱の破損（柱中央に蟻害）

屋根の破損（瓦の緩み、屋根に植生）

屋根の破損（野地の腐朽）

小屋組解体状況

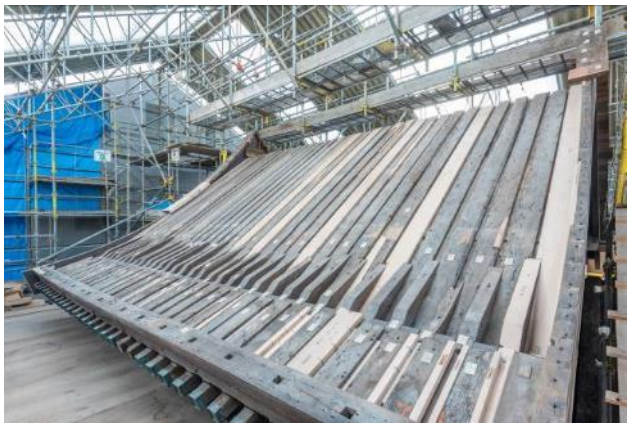
梁組解体状況

軸部解体状況

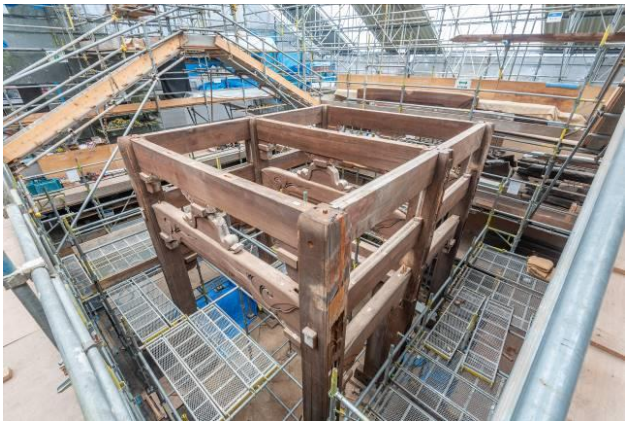
基礎石据え直し状況

建物組み立て中の状況

地覆・藁座組立状況



軒廻り組立状況



軸部組立状況

小屋組組立状況

梁組組立状況

野地板組立状況

発掘調査（大雄宝殿）

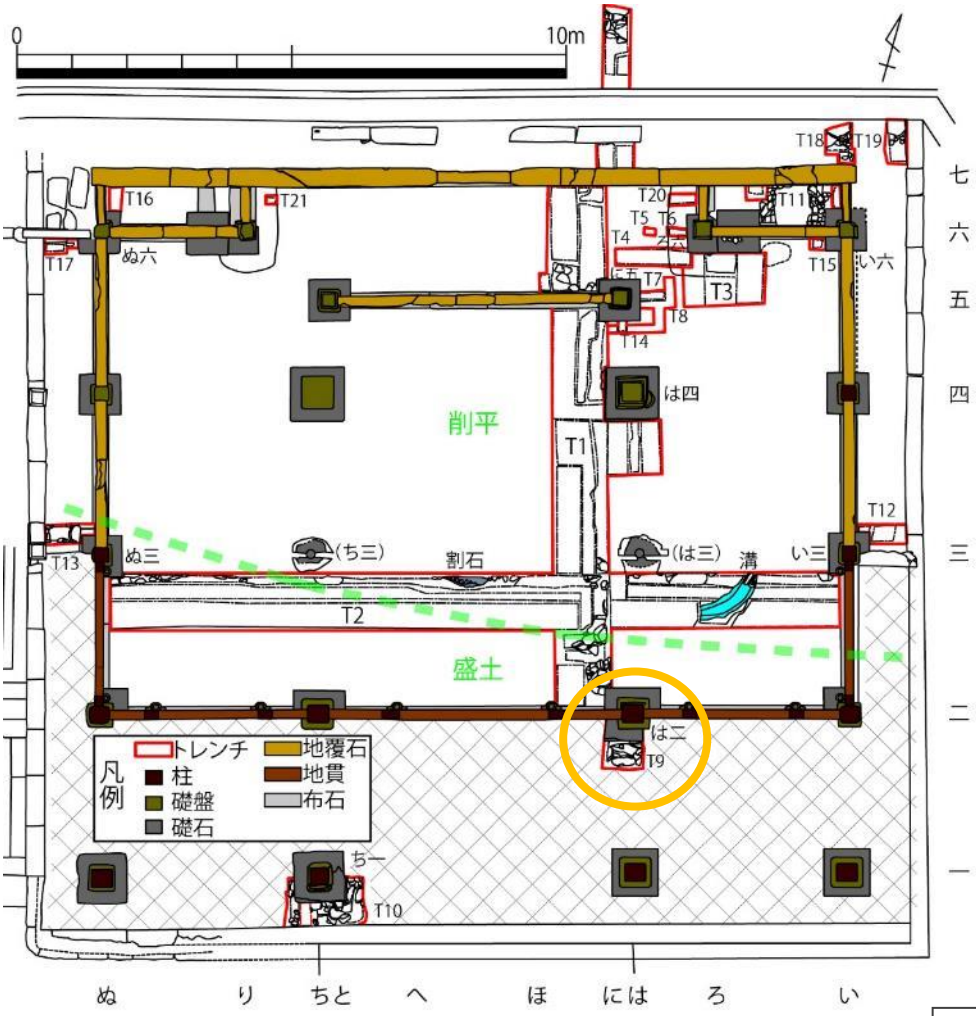
大雄宝殿の地下の状況を確認するために、令和６年１月から３月まで発掘調査を実施しました。大雄宝殿の敷地は、斜面を削平（さくへい）及び盛土して平坦面を作り出していることが判明しました。削平部分の礎石は、露出した岩盤をさらに掘りこみ、板石を敷いて高さを調整して設置しています。盛土部分の礎石は、礎石と同程度の大きさの石を数段設置し高さを調整しています。床は大まかに３層の三和土（たたき）が敷設され、色調は、１層目は白色、２層目は赤色及び赤褐色、３層目は白色となり、１層では遺物の出土はありませんが、２層から木片（削り屑）、３層では瓦・磁器が出土しました。遺物はほとんどが盛土部分や溝からの出土で、江戸時代の国産陶磁器や輸入陶磁器が出土しています。

三和土掘削作業

溝　遺物出土状況

割石

土層（三和土）状況



大雄宝殿平面図

「は二」遺物出土状況

「は二」礎石下部構造

文化財めぐり
主　催／長崎市文化財課（TEL:095-829-1193）
発行日／令和６年６月29日